

令和5年第17回教育委員会会議録

1 日時

令和5年10月10日（火）10時00分

2 場所

教育委員会会議室

3 出席者

教 育 長：石橋正信

教育委員：町孝、原志津子、武部愛子、西村早苗、徳成晃隆

事 務 局：福田教育次長、木下理事

中尾総務部長、峯川職員部長、齊藤指導部長、山田部長（高校教育等担当）

中野総務課長、平川教育政策課長、野口職員課長、坂崎教職員第1課長、竹内教職員第2課長、石橋学校企画課長、加茂安全・安心推進課長

4 会議事項

(1) 付議事項

付議案第67号 附属機関委員の人事について

付議案第68号 令和5年度福岡市教育委員会表彰について

(2) 臨時代理報告事項

なし

(3) 協議・報告事項

協議・報告ア 令和5年度全国学力・学習状況調査の結果について

協議・報告イ 令和6年度に向けた市政取組方針について

協議・報告ウ 令和6年度福岡市立学校人事配置の考え方について

協議・報告エ 令和6年度福岡市立学校教員採用候補者選考試験実施状況について

5 開会

教育長開会を宣告 10時00分

付議案第67号は附属機関委員の委嘱に関する案件のため、付議案第68号は表彰に関する案件のため、協議・報告ウ及びエは人事に関する案件のため、議決により非公開とされた。

6 付議事項

▼付議案第67号 附属機関委員の人事について

加茂課長より説明

《原案どおり可決》

▼付議案第68号 令和5年度福岡市教育委員会表彰について

中野課長より説明

《原案どおり可決》

7 臨時代理報告事項

なし

8 協議・報告事項

▼協議・報告ア 令和5年度全国学力・学習状況調査の結果について

石橋課長より説明

[質疑等]

(町委員)

○ 今回ショックなことが何点かあった。1点目は英語について、今まで福岡市は英語教育にかなり力を入れており、英検3級程度の力をもつ生徒が全国平均より高いといわれてきた中で、今回みてみると全国平均を下回っている。点数に一喜一憂する必要はないし、今からの対策をどのようにしていくかが大事である。もっといえば、子どもたちが大人になったときに世界の中で働く人になっているのかということをやってこそその教育だと思う。中学校の英語については辛口なことを言ったが、国語、数学はかなり良い。私が、政令指定都市について、文部科学省が出すデータを基に見ると、国語と数学は20都市の中で4番目くらいの結果であった。確認だが、現在の中学生が小学6年生のときのデータは、コロナの影響で調査がなかったのか。

(石橋課長)

○ そのとおりである。

(町委員)

○ 小学校の国語については政令指定都市の中で最下位、算数については12位である。福岡県や北九州市の平均よりも低い。これは、中学校の数学のように授業の

改善をしていけば少しずつ良くなってくるとは思う。子どもたちに点数のことはあまり言わなくて良いとは思うが、全国の中で最下位になるようなのはどうかと思う。対策に記載されていることを是非実行していただきたい。また、児童質問紙及び学校質問紙調査について、先ほど説明があったように、昨年度よりは良くなっているのかもしれないが、否定的な意見が多く、全国平均を下回っているのは、教科調査の結果よりもむしろこっちの方が大変だと思う。これをどうやって解説していくかということの方が大変ではないかと思う。唯一ほっとするのは、

「自分には、よいところがある」、「学校に行くのは楽しいと思う」についての回答が全国平均よりも高いところである。点数は気にするなとは言うものの、他の人たちがみたときに福岡市はどうなのだろうかと思われる点は点数化されたところなので、是非みんなで改善して対策を立ててやっていただきたい。順番を言う必要はないが、今回は中学校の英語と小学校の国語については残念であったし、今の小学6年生が中学3年生になったときにまた調査があると思うが、その時は今の中学生と同じくらいの結果となるように取り組んでいってほしい。

(石橋課長)

- 子どもたちが学びに向かっていく意欲を育てていく必要があると思っている。決して今の小学6年生が、5年生のときに学力に課題があったわけではなく、福岡市独自の調査においても結果を残しているので、調査の仕方といったことも含めて取り組むことが大事だと思っている。

(町委員)

- 今回の全国の結果をみると東高西低、東の方が高く西の方が低い状況である。英語は、首都圏、大都会の正答率が高い。東京都が全体の10分の1程度のリソースをもっているので平均点を押し上げており、47都道府県中の上位14~15位が平均点になっている。対策をしっかりとすれば2、3年は結果が良くなるが、そういったものは長続きしないので、地道に日頃の子どもたちの能力を高めてあげることが大事である。

(徳成委員)

- 学力テスト対策としてつけた学力は剥落していくということはこれまでも言われてきているところである。学力の根底には、家庭環境や経済状況であったり、様々な要因があるということも指摘されてきたところである。そのような中で、福岡市の学校現場では様々な取り組みを進めてきており、平均点が低いからと追い込むようなことは絶対にしてはいけないのではないか。ただし、コロナ禍を経ての全国的な環境は同じであったわけで、この結果をどう受け止めるかということについては、調査目的の一番目に教育委員会として対策、分析をどうするのかということが書いてあることから、これまでの教育委員会としての教育施策は果

たしてどうだったのかということをしっかりと分析、調査し直す必要があるのではないかと考えている。

児童生徒質問紙で、気になるところはたくさんあるが、評価基準が非常に曖昧で、実際に本当にそれをしていないのか、あるいはしていても自覚がなくて実態がつかみにくいのかというところもあっての評価だと考える。これは教員の勤務評価、目標管理もそうだが、評価基準が高ければ評価が低くなつて、求める目標設定にかかっているようにも伺えるわけで、これをどう分析していくのかということだではないか。事務局からみて、主体的、対話的で深い学びの観点からの授業改善が、福岡市の学校が全国に比べてどうなのかということも今どのように捉えられているのかお聞かせいただきたい。もう一点は、ＩＣＴに関して、福岡市は全国に先駆けて導入をしてきたわけで、今回の調査でも主体的、対話的で深い学びに繋がっていないということ、これはどうしたものかということを事務局としてどう考えているのかお聞かせいただきたい。最後になるが、10年ほど前から、学力実態調査の分析の中で「結果の出せない小学校、工夫の足りない中学校」という表現をしながらこの間改善に取り組んできたわけだが、中学校は高校受験で結果を出さなければならぬとか、定期テストでどう点数を上げるかといった即結果を求められることから、授業改善は難しいと言われてきた。今回の資料の中に「昨年度調査結果で課題が見られた問題を分析し、研究会で実践内容を共有したことで、授業改善へつながったこと」を要因としてあげられているが、どのような授業改善が行われたのか、事務局がつかんでいる範囲でお聞かせいただきたい。

(石橋課長)

- 主体的、対話的で深い学びの観点について、ＩＣＴとも関連があつて、現在ＩＣＴを活用して、子どもたちが主体的に考えていいたり、表現していいたりということに重きを置いて授業改善を行つてゐる。ただし、学校によつていろいろと課題があり、その辺りについてまだ我々が、こんな学びをしていいたらよい、こんな手立てをとっていいたらよいといったところを示すことができていないところもある。これから学びについては、我々も研究して、早急に学校と共有しながら手を打つて行きたいと考えてゐる。また、ＩＣＴの活用については、福岡市は活用率が良く、ほとんどの学校で担任等がＩＣＴを活用しているところであるが、子どもたちが自分の考えを整理して表現していくような、活用のあり方についてはまだまだ課題があると捉えている。また、中学校については、教科の研究会がしっかりとしており、全国学力・学習状況調査の結果をまず研究会で共有してゐる。そして、それぞれの部会等で課題を整理しながら、各学校の教科部会に落としていって、しっかりと学習しているところである。中学校も以前は講話型というか、先生がずっと黒板に書いて、子どもが聞いて勉強していくチョーク・ア

ンド・トーク形が多かったが、今はそうではなく、子どもたちがそれぞれに学び合う授業が多くなっている。その辺りも含めて結果が出ているのではないかと捉えている。

(徳成委員)

○ 中学校についてよく分かった。今、全国的に探究学習、自由進度学習等の学習スタイルが模索されているが、全国的に取り組み始められているので、是非、教育委員会としても先進的な取組みをしているところに視察に行って勉強したいところだが、そういう取組をしたした学校というのは、当然ながら、子どもたちの自己分析、自己幸福感を厳しく捉える傾向にあるといわれている。自分がうまくいかなかつたことに対して厳しい評価をするので、当然質問紙も厳しい結果になるわけだが、それを続けていくうちにどんどん見通しがみえてきて効果が現れだと、自己肯定感が高くなっていくということを、広島や京都の学校の取組みとして聞いたことがある。かつての授業改善というのは、めあて、対話、振返り、まとめを徹底していくこうと、板書の中できっちり明示しながら、一連の授業構成として取り組んでいくことを徹底していった経過がある。今どきの傾向をみると、めあてにしても、自分で作る、あるいは友達と共有して作る、対話も一律一斉に先生がさせるのではなく、子どもたちが自由に対話を始めて、課題を解決して振返り、まとめにもっていくということが主流になってきているようだが、福岡市の学校は今それがどうなっているのか。百道浜小学校での総合教育会議で見せていただいたときにそのようなケースが見られたが、福岡市の学校全体としてはどうなのか、事務局としてどう捉えているのかお聞かせいただきたい。

(石橋課長)

○ 子どもたちが学習を自己調整していく力というのは、これから非常に大事であり、目当てを出してそれを解いていくというところから、子どもたちが、それぞれの課題や関心に応じて、自ら解決していく力が大事だと思っている。今後、そういう授業のあり方についてしっかりと検証していきたいと考えている。

(徳成委員)

○ 授業方法の大転換といったことが全国的に各学校で熱心に取り組まれているようだが、新しいスタイルに変えていくときというのは、多少の混乱、なかなかうまく軌道に乗れないといったことをくぐった上で、そういう方向性にたどり着いていくと思うので、是非、先進的に取り組んでいる学校の事例を市全体で共有しながら取組みを広げていただければと考える。もう一点、児童質問紙の中で、不登校児が増えている中で「学校に行くのは楽しいと思う」という意見が多かったのは喜ばしいことだが、楽しいという根拠は何なのか、ほとんど明確ではない。関連してみていくと友だち関係というのは子どもたちにとっては大きいのだろうが、この間福岡市で取り組んできた学校文化の見直し、制服の問題、校則の問題

を含めて、学校運営に子どもたちが参画していく機会がこれから増えてくるかと思うが、そのような中で、学校を自分たちで主体的に作っていくという意識を子どもたちの中に醸成していく中でもっと改善がなされていくのではないか。

(武部委員)

○ 我々も大学のシラバスの見直しなどで、如何に学生がそれをみて事前に学習しているかということが文部科学省においても言われていて、書き直しをしているところである。予習的なというか、それがつまりは子どもたちに自分で考えることに近づいていくのではと思いながら話を聞いていた。もう一点、私はいろいろな検査を、知能検査をしたりするので、今回非常に気になったのは無解答率の高さである。無解答というのは、知識はもちろん必要だが、いろいろやっているうちに答えがみえてくるということもあって、数打てばみえてくる答えが出てくるが、最初から諦め気味で遠慮がちというか、取り組めない、あれこれ書いてみない、そういうこと 자체が、知識とは別の部分でチャレンジするとか、とりあえずこれかなといった力が、今落ち気味だということは、自分がいろいろとそういった子どもたちと接てきて、二者択一というか、選択肢のあるものは正答率が良いのに、自分で解答を作らなければならないことになると口をつぐんでしまう子どもたちがとても多くて、そういう意味ではそこも積極的に取り組むことができる力というものをどうやってつけていくかということを思っている。答えがすぐ出るとは思っていないが、意見、参考として伝えておく。もう一点、オーソドックスな発達の部分で知っておいていただけると良いと思うのは、質問紙について、発達的にいうと、児童はがんばることを認められる時期であるので、がんばった、がんばっているという、やれている感をここでたくさん手に入れないと、その後で中学生になってまだまだだなという、全体の中の自分というものを感じることができるようになるので、小学校の間は、自分が結果ではなくて、すごくがんばれているというところを認めてもらうことで先に繋がる時期だと思う。そういう意味で小学生の質問紙が低いのがとても気になっていて、もう少し「やったよ」と言えてほしいということを思った。

(原委員)

○ 小学校と中学校とで、毎年小学校の方が低くて、中学校が全国平均より高い傾向にあるのか。

(石橋課長)

○ 昨年度調査の結果では、そのような傾向は見られていない。

(原委員)

○ 小学校はこれだけ低いが中学校がある程度良いということであれば、中学校の方は受験を意識したスピードというか、受け方についてはある程度練習しており頃から意識しているからこういった結果になっているのかと思った。一点気に

なったのは、小学校の国語について、文章を読んで情報と情報との関係について理解する、複数の情報を整理するといったことは、中学校の英語でもこのような課題が出ていたが、こういった基礎的な力は、今後、ＩＣＴを活用することになったとしても重要になってくると思うので、その辺りの小学校の課題については重要視して対策をとっていただきたい。

(石橋課長)

- ご指摘の内容については、我々としても課題として大きく認識しているところである。国語だけでなく全ての教科において、情報を収集して、考えを作って、表現するという内容があるので、全教科、全学年でしっかりと取り組んでいく必要があると考えている。

(石橋教育長)

- 今回の調査結果については、事務局としても結果が出た時点で、そういういろいろな意味で危機感、課題認識をもっていた。特に小学校は今回課題が多く、中学校の英語でも課題が見られたので、その中で何が課題なのか事務局でも検討してきたところである。授業の改善をしても成果が出るのはずいぶん先になる。いろいろな改善をしても何が成果になっているのか分からぬし、学力はまさに総合力で、非認知能力の高い子どもたちが全体の中に多いだとか、福岡市の中で家庭の経済力がどれだけ状況として悪化しているのかといったいろいろな要素が反映されるので、なるべく、今データ駆動型にするということで、原因と結果の関係が明確になるように取組みを進めており、今ちょうど過渡期にあるので、いろいろデータを集めながら一番良い方法を早期に見つけていこうとしているところである。

(町委員)

- 小学校で1回、中学校で1回調査があるとのことだが、私立中に進学した子どもは除いて公立中学校にそのままスライドすると、だいたい小学校のときにこのくらいだったら中学校でこのくらいになっているというものはあるか。

(石橋課長)

- ある程度そういった傾向がみられる。

▼協議・報告イ 令和6年度に向けた市政取組方針について

平川課長より説明

[質疑等]

なし

▼協議・報告ウ 令和6年度福岡市立学校人事配置の考え方について

竹内課長より説明

▼協議・報告エ 令和6年度福岡市立学校教員採用候補者選考試験実施状況について

坂崎課長より説明

9 閉会

教育長閉会を宣告 11時48分